

令和3年産小麦の作況と麦類の当面の技術対策

技術支援課
(普及指導室)

生育の概況	小麦の出穂期は、平年より5～7日程度早まったが、成熟期は平年並～やや早まる程度となる見込み。一部で枯れ熟れが散見されている。作柄は「並」が見込まれる。
作業の進捗状況	排水対策・収穫準備・適期収穫

1 気象経過 (前橋地方気象台の気象データ、※5月は20日まで、参考資料参照)

項目	11月	12月	1月	2月	3月	4月	※5月
平均気温(平年差)	+1.5℃	+0.3℃	+0.5℃	+2.3℃	+3.5℃	+0.8℃	+0.9℃
降水量(平年比)	8%	0%	105%	95%	117%	65%	30%
日照時間(平年比)	113%	107%	92%	116%	102%	111%	73%

2 生育概況

(1) 概要

1月下旬以降、気温が非常に高く経過したため、出穂期は小麦は平年より5～7日、二条大麦では7～10日、六条大麦は4～5日程度早まった。登熟は概ね順調であるが、4月下旬の低温や5月中旬の曇雨天が影響し、登熟がやや緩慢となっている。そのため、登熟日数は平年より多く要する見込みで、成熟期は平年並～やや早まる程度と見られ、一部で平年より遅れる地域もある。穂数は概ね確保されているが、播種が遅れたほ場でやや少ない。

一部で過剰生育や乾燥による出芽不良等の影響により遅発穂の発生が多く、生育差が著しいほ場が散見されている。また、大麦では成熟期付近に降雨に遭遇しているため倒伏が多く、収量への影響や外観品質の低下、穂発芽の発生などが懸念される。

5月20日発表の長期予報では、向こう1か月は気温が高く、降水量が多いと予想されているため、各麦種とも刈り遅れや穂発芽等による品質の著しい低下が懸念される。

(2) 病害虫・障害等の発生状況

出芽不良となったほ場で雑草の発生が多い。一部で問題雑草(ネズミムギ、ヤグルマギク等)が増加傾向。

二条大麦では降雨による倒伏が発生している。

小麦では県中部地域の乾きやすいほ場で枯れ熟れが発生している。

(3) 作況ほ等の調査結果

作況ほの出穂期は県平均で4月15日(過去平均比-5日早)、穂数は662本/m²(同101%)となっている。

農業技術センターの生育基本調査結果(小麦「さとのそら」、11月17日播種)では、出穂期は4月16日(同-8日)、稈長は83cm(同108%)、穂長は9.1cm(同105%)、穂数は519本/m²(同108%)となっている。積算気温による5月20日現在の予想される成熟期は6月3日(同-7日)であるが、これより後進する見込みである。

(4) 作柄のまとめ

各地域の作柄は、中部・東部・西部が「並」、伊勢崎が「並～やや不良」、館林が「やや良～並」であることから、県内の小麦の平均作柄は「並」が見込まれる。

表1 小麦作況は調査結果（さとのそら）

地区	播種期 月日	出穂期 月日	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/m ²	穂重 g/m ²
平均	11/19(-2)	4/15(-5)	78(103)	8.3(101)	662(101)	—
前橋市	11/16(-4)	4/17(-6)	75(97)	8.4(98)	581(83)	—
伊勢崎市	11/22(+4)	4/16(-3)	83(106)	8.3(98)	725(110)	491(93)
高崎市	11/13(-7)	4/13(-3)	71(101)	8.0(104)	679(107)	431(122)
太田市	11/25(-3)	4/15(-9)	83(109)	8.3(105)	662(107)	545(114)
邑楽町	11/7(-15)	4/14(-12)	79(108)	8.4(105)	654(134)	457(112)

*各地区の()内は過去の平均値に対する日数および比率(%)。

*日数の「-」は早い、「+」は遅いことを示す。

*過去の平均値は、前橋市は過去9年、伊勢崎市は同8年、高崎市は同1年、太田市は同9年。邑楽町は特異値のため県平均から除外した。

表2 生育基本調査結果（農業技術センター、さとのそら）

播種期 月/日	節間伸長始期 月/日	出穂期 月/日	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/m ²
11/17 (+3)	3/18 (-6)	4/16 (-8)	83 (108)	9.1 (105)	523 (108)

※()内は平年値は過去10年の平均に対する日数および比率(%)。

表3 普及指導課・地区農業指導センター管内の麦類の作柄概況

地区	県平均	中部	伊勢崎	西部	東部	館林
作柄概況	並	並	並～ やや不良	並	並	やや良 ～並

3 技術対策

(1) 収穫準備・適正収穫

- ア 収穫までの降雨に備え、排水不良のほ場では、排水溝の確認や手直しを行う。
- イ 収穫物に雑草種子や異種穀粒などが混入しないよう対策（抜き取る等）を行う。
- ウ 機械類の清掃を徹底し、収穫物への異物混入を防止する。
- エ 荷受け施設においては、麦の生育状況に合わせた稼働計画を設定する。
- オ 著しい生育むらによる未熟粒の多発・倒伏・穂発芽・赤かび病・なまぐさ黒穂病の有無を確認し、これらの発生が認められた場合は別収穫とし、乾燥調製施設への搬入は行わない。
- カ 収穫適期の目安は、穀粒水分が25%以下になった時を基準とする。穂首の曲がり状態で判断すると、二条大麦が90%以上、小麦・六条大麦が50%以上の時である。ただし、遅発穂が見られる場合は収穫を数日遅らせる。
- キ 二条大麦は穀皮が薄く損傷粒が発生しやすいので、コンバインのこぎ胴回転数の設定に留意する。
- ク 成熟期後に長雨が予想される場合、穂発芽を避けるため収穫可能なほ場はできる限り収穫作業を行う。

(2) 乾燥・調製

- ア 収穫した穀類をそのまま長期間放置すると、発熱により品質が低下するため、収穫作業は乾燥能力に見合った量とし、計画的に実施する。やむをえず高水分麦を収穫した場合は、速やかに乾燥を行う。

イ 乾燥調製施設では、穂発芽・赤かび病・なまぐさ黒穂病等の被害粒やカラスノエンドウ等の雑草種子が混入しないよう荷受時の確認を徹底する。

ウ 調製は、適正なふるい目により未熟粒などの除去に努め、整粒歩合を小麦80%以上、ビール大麦90%以上とする。未熟粒が多い場合は特に丁寧に調製を行う。

(3) 災害対策等

穂発芽等の気象災害が発生した場合は、被害麦を収穫しては場外に持ち出す。一方、降ひょうにより麦が脱粒したり、その他の災害等によりやむを得ずすき込む場合など、麦種実がほ場に投入される場合は後作の施肥量の調整を行う。後作が水稻の場合は、脱粒子実が300kg/10a程度では基肥窒素を1~2割減肥し、400kg/10a以上では2kg/10a程度にとどめる。さらに、土壌の強還元化を防止するため、間断かん水や中干し等の水管理を十分に行う。

(4) 麦わら処理

麦わらは有効な資源である。焼却は避け、すき込むなど適正に処理する。

【参考資料】

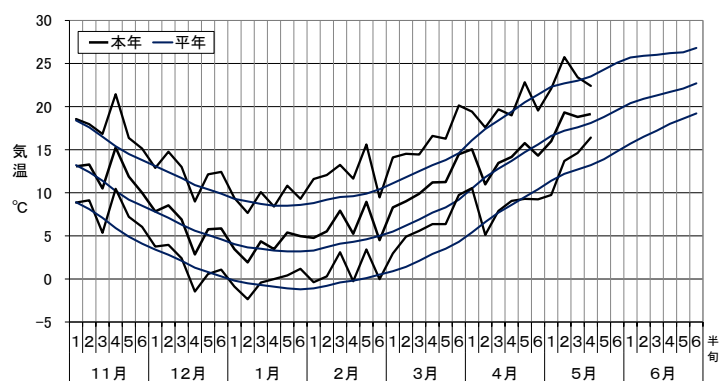


図1 麦作期間の気温 (前橋地方気象台)

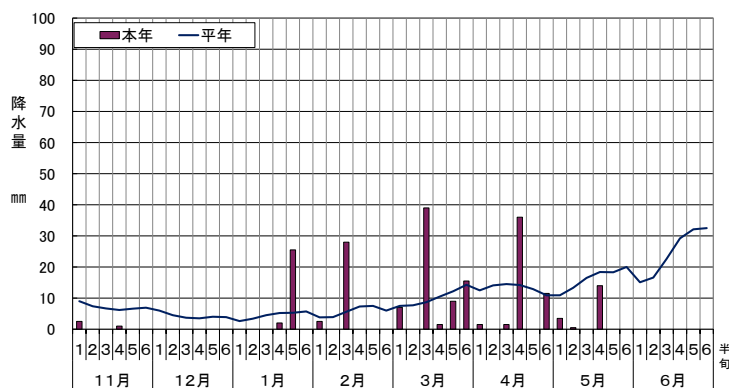


図2 麦作期間の降水量 (前橋地方気象台)

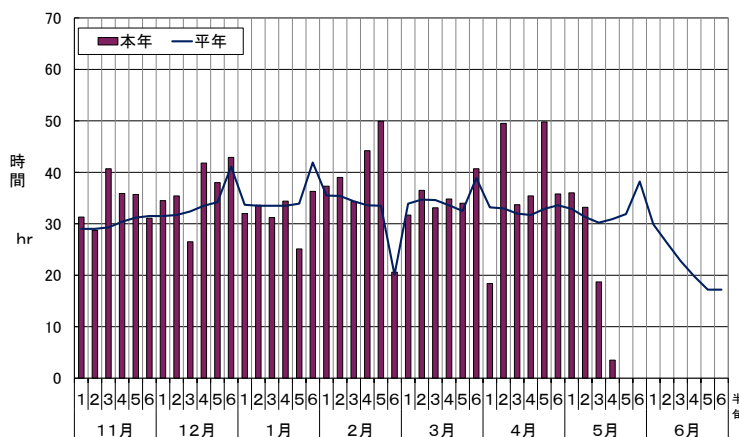


図3 麦作期間の日照時間 (前橋地方気象台)